

## 2025 年度校友会奨学金 選考評 | 一般社団法人多摩美術大学校友会

**石井和哉**

申請者はこれまで「絵画の規定の形式として浸透しているものを拒絶するという手法」を用いて制作を続けました。カンヴァスという支持体をラップフィルム等に置き換え自由闊達に表現していく様は、支持体・枠・絵の具といったものたちを同列の材料として作者の美意識に沿って操ってゆく行為なのかなと捉えています。制作そして発表ごとに進んでゆく申請者の試行と思考に大きな期待をしています。

**ZOU Na**

葛藤を引き受けようとする強い意力を感じる企画。素材研究と空間設計が、物語性を帯びる。その作家性に期待したい。

**牧野優希**

有機的な形態が幾層にも連なり、画面に心地よいレイヤーを生み出している。白地が残る作品は東洋的な余白のようで、風通しの良さの中に作者が言う「体感的風土」を連想させる。日々歩く行為を通し、日々小説を読むことを通し、日々音楽を聴くことを通し変化する外界との関わりを、日記に記すように絵に委ねる。そうした感動の源泉を絶やす事なく、常に身体性を軸に淡々と描いて行って欲しい。

**前野乃映**

作者の独自の視点は、視覚化できないであろう音を、数値やグラフ、表などの既存のメディアを使用することなく明示しようと試みている点である。過去の作品で、地震速報の音源と石、砂利を使用したものは、速報自体が石の山を崩してゆくという矛盾をはらんだ作品で面白い。一方これから作ろうとしている作品は未知数である。スピーカーの形状に寄りすぎているのは気になるが、音と彫刻との関係の深掘りに期待している。

**太田皓士**

おそらく一貫して「二面性」であったり「表裏」ということにフォーカスして制作してきた申請者は、モザイク画という手法を取り入れることで、また近作ではスケール感重量感に比すれば華奢な鉄の造形と組み合わせることで表現したい内容を“危うく”成立させる場にたどり着いた様に思います。またそこから次の場へと歩を進める今回の応募研究計画に大きな期待をしています。

## 定光利季

---

公共空間に設置されるベンチには、ある時期から手すりの形をした仕切りが設置されるようになった。それ以来、ベンチで横たわったり、寝ることが出来なくなった。ホームレスなど支援が必要とされる人々は、問題の本質的な解決なしに公共空間から隠されるように排除され、またホームレスでない人にとっても、その場で休むことが出来ない場になってしまった。こうした問題をボイスの「社会彫刻」や、岡本太郎の「坐ることを拒否する椅子」をリファレンスとしながら、その排除や抑圧の「かたち」を彫刻として立体化するというアプローチが高く評価できる。今後、長期間にわたって設置することで起きる状況の変化や、その場の管理者や行政の対応を記録したり、この作品の作り方をオープンに公開し、排除ベンチを無効化する様々な方法を広く一般に共有していくことなども期待したい。

## LIU Yuchen

---

ユニークな（独自性のある）テーマ設定を評価したい。批評性を内包する態度と身体との関係性をめぐる研究／創作である。出力方法の探索とテーマの関係性も注目に値する。

## レイモンド愛華 エリザベス

---

この作品は、型に頼らず、ガラスが平面から立体へと変化するプロセスそのものを表現の一部とし、素材の変容と作家の身体的関与を視覚的に提示しています。重力や熱による自然な変形と、それに応答する作家の操作が呼応し、素材と身体の間を対話を感じさせる点が印象的です。単なる創形物にとどまらず、身体性・時間性・物質性を内包した新たなガラス表現としての可能性を強く示しており、今後の展開にも大きな期待が寄せられます。

## 柴田勇紀

---

衣類＝着用という概念として捉えるのではなく、可塑性のある物質として衣類を捉えており、視点の軽やかさが非常に心地よいです。身体と衣服という相互依存関係に、空間や状態といった要素が加わることで、その関係性が少しずつほぐれていく感覚があります。ただ、資料内容を見ると抽象的な表現が多く、意図が伝わりづらい場面もあるかもしれません。今後の成長を期待しています。

## 松永李音

---

小さな細胞の集積が、やがて大きな生命を生み出すようなスケールを感じさせる作品だ。織物の工程は、1本の線が集積してゆき、やがて面が現れ、さらに立体まで発展するものだが、作者は立ち現れること自体に重点をおいている。そこにはなんとも名付け得ぬ原初の形態が立ち現れていて、興味深い。

過去の作品は絵柄を作ることを主眼に集積が使われており、そのこと自体に向かっていないのは残念だが、新作の大作は楽しみだ。

## 小島平莉

---

母という存在を中心に自らの家族・家庭の個人的な体験を、布絵という手法で表現しようとする方法が素晴らしい。布という、日常に存在していて、誰もが身につけ、身近で素朴な素材だからこそ、私的な問題を他者へと媒介する役割を果たしうると思う。過去作にも見られるスローガンのような言葉や、布の模様による反復、そして触れることによる触感など、さまざまな要素が複合的に絡み合い、日常の持続とその尊さや、一方で抑圧された「無名の声」といった多層的な意味を構成しているのだと思う。個展の開催だけでなく、さらに今後の国際的な活躍を期待したい。

## 山際あゆ

---

作者は、「拠る」「組む」という行為を通じて素材と対話し、構造と形が一体となるプロセスを可視化しています。拠った糸や線や面としての構成し、空間的に配置するその表現は、繊維造形の原点とも言える行為に立脚しながら、その表現に新たな可能性を切り拓いています。制作行為そのものに注目し、素材と身体の関係を見つめ直し姿勢は、繊維という素材の本質に迫る新たな視点による試みとして、高い創造性と探究心がうかがえます

## 石丸めぐみ

---

対話型AIを神秘主義的な立ち位置と捉え、魔女と使い魔という関係性を見出した点がとても興味深いです。ここでいう魔女と使い魔との主従関係は、対話型AIと作者と入れ替えることもでき、テーマの複雑性を秘めています。扱う事象やオブジェクトの選定が非常に上巧みで、使われている言葉にも魅力を感じます。ただ、作品の造形的な完成度はまだこれからという印象があるので、今後の成長を期待しています。

## 新井碧

---

息遣いそのままに、伸びやかで踊るような筆のストロークが心地良い。加えて色彩の階調が美しく、赤や青の色面と共に幾層ものレイヤーを醸し出す。芳潤な画面はどこまでも味わい深く、見飽きることがない。作者はパステルや木炭など油彩以外の画材を効果的に用い、より重層的に作品を息づかせている。画面と向き合いこれからも直感を信じ、素材と対話しながら描いて行って欲しい。

## YANG Enjui

---

書籍を手に取り、文字を追いながらページをめくる際に指先が感じる重みや素材のテクスチャは、得られる情報や体験に対して無意識のうちに影響を与えている。廃棄される素材の美しさを拾い集めて再構成した媒体によって、新たな体験を生み出そうとする造形実験はとても興味深い試みである。環境問題だけでなく、多様な知覚を持つ人々へのアクセシビリティを視野に入れたインクルーシブデザインの観点からも、この試みの展開に大きな可能性を感じる。

## 高橋真依愛

---

遠い過去の材料や技術は研究や保存の対象であることが多く、特に縄文時代まで遡るとなかなか新しい表現には結びつかないものである。しかしそこに着目したところがすばらしく、過去の技術を後世に残すだけでなく、新しい技術との組み合わせによって新たな表現に取り組むという視点は高く評価できる。産地を訪ねて材料を得るといったフィールドワークを重ねることが研究と表現の深さにつながり、その成果が大きく期待できる。

## 亀井杏果

---

「Tug at heartstrings」心を揺さぶられる5つの出来事をテーマとするテキスタイルの制作を計画している。これまでの研究活動として示した3 lookでは、時の流れをテーマとする洋服の制作に取り組んでおり、素材と技法に感情を重ねた豊かな表情が魅力的な作品である。これらの作品は本計画作品での展開の可能性を想像させる。研究計画では、より多様な素材と染色プリント等の技法により、さらなる感情を揺さぶる表現 5 lookを試みようとしており、研究成果を期待している。

## MENG Ziqian

---

在宅介護というテーマはシリアスかつ切実であり、この先ますます需要が高まると予想される。被介護者のプライバシーと尊厳の課題に着目し、介護施設における物理的・心理的な知見を、家庭空間に応用する視点は新鮮かつ実践的である。また、美術・デザインの専門性から、福祉・医療に関する分野にアプローチする姿勢は、学際的であり意義深い。

## 慶野仁希

---

「露と落ち 露と消えにし 我が身かな 浪速のことも 夢のまた夢」「建つことない建築”あるいは“映画美術の空間”、は夢の中で夢を見ているかのような、なんとも儚いものである。しかし同時に「キメラ」のように、人の脳内に忘れられない鮮烈な像として焼き付けられ不滅のものとして実在するものよりも強い光を放ちそこに存在することとなる。異なった世界線を旅する秘訣は、まずは純粹に感じとり、その感動の上に考察を深めること。では、いい旅を！

## HAO Yang

---

記憶や文化の再解釈を試みるアート形態であるアーカイブ構築の実践と、地理的情報に帰属する作品や過去の記憶などを活用・再構築するサイト・スペシフィック・アートの接点を模索する意欲的な研究である。アーキビストを自認する申請者は、デジタルアーカイブの情報表現技術とともに内在する空間性・時間性に着目。歴史上の地理図式と時制を記号化するなどの先行研究を重ねて来た。今後の更なる研究の進展に期待したい。